

千葉（せんえう）と千重の国語学

東京 野口慎一

京都誓願寺の法主安楽庵策伝和尚の「百椿集」(1663)では、それぞれの椿の花弁の数を葉でかぞえ、一葉、三葉、四葉、五葉などと記しています。拾い読みしてみると、「珍シヤ一葉一葉ゾ散リケル」、「三葉ニ咲キノメヌ」などと書かれています。「椿花ハ五葉ニ開クコソ常」つまり当たり前ですが椿の一重は五葉です。「山椿一重ニ咲」訳です。また、「二重ノ様ニアリ」と説明されている花があります、二重は十枚くらいの花びらが重なっていることとなります。「蟬ノ羽衣」は「是ハ千葉ノ白玉也」とありますので、花びらがたくさんある白椿だったわけです。

一方、同時代の公家の日記「時慶卿記」(西洞院時慶1613～39)では、葉は使われていません。「白キ二重ノ椿」(寛永15年)があります。多弁の白椿を「千重の白玉」(元和7年)と言っています。また、「千会の石榴」(寛永9年)とも言っています。(森末義彰氏翻刻)会は重の借り字だと思われます。海石榴はつばきのことですから、これは千重の椿のことで、御所のお花畠に西洞院殿が自ら植えたことと記しています。

江戸時代随一の園芸家の著した「花壇地錦抄」(伊藤伊兵衛1695)で多弁の品種の説明には「せんよう」が使われています。「万葉」も使われていますが、何故か千葉は平仮名で書かれています。「本草花蒔絵」(同1739)は千葉を「せんえう」と書いています。いずれの本も千重はありません。

「諸色花形帖」(撰津、東山村吉右衛門1789)では一重、二重、八重、と言い、最も多弁を千重としています。例えば「大神楽」について「上本紅千重獅子才早咲…」と記述しています。(千葉は用いられていません。)

「椿伊呂波名寄せ色附」(粕谷亀五郎1859～)では冒頭で、乙女などの様な花形を図示し「せんようともふきつめといふなり」と説明してある「蕊図」(「百花椿名よせ色付」伊藤伊兵衛1730頃)を模写、借用していながら、後に書き加えられた追補部も追追補部も花形は一重、二三重、三四重、四五重、八重、千重などとなっています。どの品種の説明にもせんようはありません。ただ、蕊図だけを借用しているに過ぎません。染井の植木屋さんの販売目録、「椿花集」(伊藤小右エ門他1879)についても、言うまでもなく「千重」です。

さて、椿の古い資料から、花形について花びらの数の表現を見てきました。これまで、千葉、千重と読んでいただけていたでしょうか。以前、もう亡くなられましたが、東京駒場で明治時代創業という老舗の2代目の老園芸家から「千重をせんえ言っている人もあるようだけれど、以前は誰もが千重と言っていたんだよ。」と教えられました。この方は戦前の園芸事情についても詳しい東京の園芸界の重鎮として知られた方でした。辞書を引いてみると、千重は万葉集の時代からある言葉で、千重の一重も、という慣用句もあり、千に一つも(ない)の意味であるとあります。つまり千重は、ちえとしか読まない言葉で、同じものがた

くさん重なることです。(万葉集(5)「白雲の千重に隔てる筑紫の国は」)

「～七重、八重、九重、十重、二十重だから、訓読みしていけば千重となるのが当たり前のことだろ。」とは椿園芸の先輩吉澤郁雄氏の言葉です。場合によっては、二重に巻く、三重唱、五重奏などと言いますが、それならば、重ねの文字も音読みし千重としなければ変です。いずれにしろ、千重をせんえと読むのは誤読です。

『百花椿名よせ色付』(伊藤伊兵衛 1733 頃) は、同家の江戸椿の販売用目録ですが、解説の表現が混用されています。ほとんどが「せんよう」と説明されていますが、「南蛮星」「ふじの雪」は「せんえ」となっています。一方「阿蘭陀白」と「玉川」は「千重」となっています。

千重を「せんえ」と読むことは有り得ないことです。先の園芸書、「花壇地錦抄」をもう一度調べてみました。底本は5版ほどあるようでそれぞれ違うのでしょう、数冊の解説本などで、この千葉のひらがな表記は、それぞれ違っています。各版によって二通りから四通りがあり、「せんやう」、「せん屋う」などの表記も含めて合計七通りとなっています。ある解説本は「せんえふ、せんへ、せんよ」の三通りがあるのですが、その他の表記はありません。また、別の解説本では「せんゑ、せんよう、せんよ」でした。旧仮名使いは色々で、原本を読んでいる版でも、四通りの表記があって、同一の版でも統一されてはいないことを確認しています。千葉をこのように書いていた(発音していた)訳です。

良いを関西ではええと言います。よとえといは対応しています。良いはいいとも言うからです。以前、私は「熊谷」(紅一重大輪 古品種)のことを言いました。くまがや、くまがい、くまがえと色々読めます。古文書に、「くまがえ」や「くまがへ」の表記があることを指摘しました。つまりやもいもえもへも区別しなかったと考えることもできるのです。つまり昔の人はせんようでも、せんえふでも気にしなかったのです。

また、江戸時代末期の人情ものに「堪忍」と言う言葉があると聞きました。また、下町言葉に「掛け軸」があったとも聞きました。いまでも、裁縫や通帳という人があります。大根おろしという人もあります。トンボと言う言葉も飛ぶ棒がとん棒と訛って、うが落ちて、とんぼとなったのだといひます。語尾を発音しなかったことが定着したということです。東京の郊外で生まれ育った私は、漬物の新香や香香をしんこ、こうこというのが普通で、自身一度も正しくうを付けて言ったことは無いと思います。それが辞書でこう書くのだと知って驚いたものです。語尾が発音されないことはしばしばあることです。(椿の名前でも紅乙女というのが普通ですがこれも江戸言葉の名残かしら?)

いずれにしろ、千葉と千重とがこの同じ冊子「百花椿名寄せ色付」(前出)で使われているのは不統一で、どういうことなのでしょう。比較的新しい江戸末期の関西系の資料、「剪花翁伝」(中山雄平 1847)も「千重」(「角の倉」、「赤芥子」など)で千葉は用いられていません。椿の咲き方の表現としてだけではなく、一般的な言葉遣いの千重のほうが千葉よりも普通の言い方だということがいえます。そこで、地錦抄とは別に一般販売用に作られた冊子では千葉(「せんよう」、「せんえ」)と共に「千重」も一部用いられたということ

だと筆者は推測しています。

ところで、前に私は雄蕊^{ゆうずい}について、これをゆうしんとは読まないと言いました。蕊^{ずい}という字にしんとふりがなを振る人がいます。当てずっぽうでしんと読んでしまうのです。蕊^{ずい}という字は学校で教えてくれないのだから読めなくて何が悪いと言う人がいます。学校で習っていないのだから、しべというのを漢字で書くと蕊と書くのだという事を知らないのが当たり前なのです。常用漢字にない文字は^{おおやけ}公^おの場で使ってはいけません。雄ずいや雄心という言葉はありますが、雄蕊^{ゆうしん}という言葉はありません。また、雄蕊と書いているのを見て、蕊は蕊の略字なのだから問題がないという人もいます。つまりその人は雄蕊をおしべと読むか、または、ゆうずいと読んでいるのです。言うまでもなく、蕊は蕊の略字や新字体ではありません。蕊（はなのしべ）と蕊（草の名前 蠟燭の心に使う草（会意）、イグサの別名）とは全くの別字で、蕊^{ずい}はしんと読みませんし、蕊^{しん}はずいと読みません。この事は常識ではないのです。そもそも、蕊^{イグサ}を使った熟語はありません。熟語の蕊^{しん}は全て心で良いのです。空心菜^{くうしんさい}と書くのは蕊^{イグサ}に関係がない野菜だからです。

やや余談ですが「椿花集」（前出）では代表的な小輪花について、「小蝶侘介」となっているのを、これに倣^{なら}って昭和になって作られた「新選椿花集」（皆川治助 1949）では「小蝶侘介」と彫違えています。侘（＝它、＝他）は侘とは別字です。侘の通用字が他で、侘は他の正字です。従って、侘は侘の略字体（新字体）ではありません。また、話しを蕊^{しべ}に戻せば、「ト伴」（唐子咲き小輪）を「椿花集」以来、昭和 24 年版まで「白蕊」と説明していたのに昭和 32 年の活字版では「白蕊」と誤植されています。

さて、草冠^{くさかんむり}に心が三つの字と同様に、千重も今日の国語教育で教えていない言葉かもしれません。私は老園芸家の口伝^{くいでん}を広く伝えておきたいと思いました。「江戸椿デイ」の講演会などでは、誤読しないように注意しています。上記の事柄は常識的なことではない部分もあるかも知れませんが、椿の愛好家には是非とも知っておいて欲しい言葉のことだと思えます。

日本ツバキ協会 江戸椿研究会 委員